



会社の汚染バスターズ

ああ、またやってしまった。
化粧室で鏡を見ながら、ため息をつく。

ミスをしたのは後輩だ。でも、あんなにとげとげした言い方をするつもりなんて最初はなかった。

私は自己嫌悪に陥っていく。

この頃は、いつもそうだ。

ちよっとしたことでもイライラして、気づいたときには声を荒げていたりする。

いや、自分だけのことじゃない。

会社全体の雰囲気もひどく悪くなっているように感じていた。

会議はつねづね重苦しくて、誰もが周りの顔色をうかがって発言をせず、促されて何かを言えば決まって嘲笑が待っている。オフィスには怒鳴り声が響いていたり、慣習による業務の無駄も一向に改善される様子がない。

そんな状況で仕事がかどるわけもなく、近頃は会社の業績も下がってきていた。

泥沼だなあ、と私は思う。

でも、そこから抜けだす術はない――。

そんなある日のことだった。

いつものようにイライラしながらデスクで仕事をしていると、オフィスが急に騒がしくなった。

うるさいな！ ぜんぜん集中できないじゃん！

文句を言おうと顔をあげたときだった。

私の目に、妙な人たちの姿が飛びこんできた。

その人たちは、なぜだか防護服のようなものに身を包んでいた。そして箱型の機械を背負い、掃除機のようなホースを手にしていた。

「お世話になります。我々は会社の汚染バスターズと申します。国の要請で御社の空気の浄化にまいりました」

はあ？ 会社の汚染バスターズ？ 空気の浄化？

何を言ってるんだと誰もが思っている中で、次に彼らは大きなモニターを掲げて見せた。そこに映っていたのは私たちのオフィスの光景だったのだけれど、どういうわけかその映像には不穏な黒いものが立ち込めていた。

「こちらはこの場所の汚染状況をリアルタイムで可視化したものです。御社の汚染の度合いは深刻です」

オフィスに別の声が響いたのは、そのときだった。

「ちよいちよいちよい、おたくら何なの？」

私はそちらに目をやった。声の主は、ふだんから誰にでも威圧的な態度をとる部長だった。

部長は彼らに突っかかった。

「つつか、誰の許可をとってるわけ？ あおね、こっちは仕事中的なの。おふざけに付き合ってる時間なんてないわけよ。だから今すぐ――」

その瞬間のことだった。

会社の汚染バスターズを名乗るひとりが、部長のほうにホースを向けた。

すぐにしゅるると何かが吸引されるような音がして、背中の機械がぶううんとうなる。

部長のトーンが変わったのは、その直後だ。



「あ、いや、えっと……」

部長はいかにも恐縮しているように頭をかいた。

「あの、その、みなさまは急にいらっしゃったものですから、私どもも大変困惑しております……もう少し詳しいお話をお聞かせ願えませんか……？」

私はびっくりしてしまふ。部長のそんな口調は初めて耳にしたからだ。

「もちろんです。ご説明いたしましょう」

バスターズのひとりが口を開く。

「世間では雰囲気が悪いことを“空気が悪い”と言うものですが、近年の研究で、まさにその言葉通りのことが起こっている事実が判明したんです。つまり、雰囲気が悪い場所には人の精神に悪影響を及ぼすネガ物質がたくさん漂っていて、実際に空気を汚染していることが分かったんです。

そのネガ物質にはいくつか種類が存在していて、たとえば心霊スポットなどには恐怖感を増長させるたぐいのものが、樹海などには不安感を増長させるたぐいのものが立ち込めていたりするんですが、それは場所が放つだけではなく、人間からも出るものでしてね。負の感情がネガ物質を生みだして、それが周囲に拡散していき、自分自身や近くにいる人をどんどん蝕んでいくんです。

御社はまさに、その汚染が進んだ状態にあるわけです。ですが、ご安心ください。我々の手にかかれば、汚染物質の除去はそう難しいことはありませんので。では、さっそく浄化を行います。お仕事はそのままつづけていただいて構いません」

まだまだ状況はぜんぜん飲みこめてはいなかった。

でも、あの部長がたちまち変わってしまった事実は衝撃的で、私はとりあえず席に戻って彼らの様子を観察することにした。

バスターズは総動員でいろんな場所にホースを向けて、しゅると空気を吸っていった。

そのうち彼らは社員に近づき、部長にしたのと同じようにひとりひとりにホースを向けはじめた。私の席にもやってきて、しゅると何かを吸いこまれる。

その直後のことだった。

私は何とも言えない清涼感に包まれた。まるで森林浴をしているような気になって、先ほどまでのイライラ感もウソみたいに消え去っていた。

バスターズはどんどん浄化を進めた。

その影響なのだろう、いつもみんなを困らせていたお局さんは、いつしか優しいお姉さんへと変化していた。セクハラおじさんは紳士に変わり、不遜な後輩は謙虚になる。

気がつくど、オフィスには窓を開けてもいないのに心地いい風が吹き抜けていた。

私は感動で胸が震えた。

「生きている以上、負の感情はつきものです。大事なのは、それをいかに処理しているかということなんです。もしまた悪化したときは、いつでもお声かけください」
そう言って去っていく彼らの背中を、私たちは尊敬のまなざしで見送った。

その日以来、会社の雰囲気は様変わりした。仕事もずいぶん円滑になり、業績も回復しはじめた。

でも、やがて私は味気なさを覚えはじめる。

たしかに雰囲気はよくなった。

が、仕事も人間関係も、ちよつと合理的になりすぎて感じるようになったのだ。

そんなある日のことだった。

オフィスに突然、見慣れない人たちがやってきた。

「お世話になります」

彼らの背中の装置からは、蒸気のようなものがモクモクと立ちのぼっていた。

なんだなんだと思っていると、彼らが言った。

「我々は会社の乾燥バスターズと申します。ドライな空気を改善すべく、御社の加湿にまいりました」